

ドリームキャンプ、役割を果たし次へ!



ひかり新聞

共生共助の社会をめざす

2023.10.25
No.48

一般社団法人
ひかりプロジェクト

東日本大震災の翌年、2012年に第1回東北ドリームキャンプが開催され、第3回からは、みちのくボランティア隊から、ドリームキャンプ実行委員会が主催を引き継ぎました。

2019年の第8回のあとは、新型コロナウイルスの感染拡大により延期となり、4年が経過しました。

その間、さまざまな制限がある中で、何か活動はできないだろうか、形を変えたドリームキャンプの可能性はないだろうかと検討してきましたが、状況は厳しく、マスク、三密を避ける、消毒、検温、黙食…等、私たちの生活も変わってきました。

今年5月から、新型コロナウイルス感染症は「5類」に位置づけられ、日常生活もコロナ以前のものに戻りつつありますが、コロナが収束したというわけではありません。今後、これまで通りのドリームキャンプを開催することは難しいと判断し、一旦ここで終了することを決定いたしました。

震災後、子どもたちに夏休みの思い出を届けてきたドリームキャンプですが、これまで皆さまから頂きましたご支援・ご協力・ご理解に、心より感謝申し上げます。

9月2日、宮城県気仙沼市のホテル一景閣で、これまでドリームキャンプの運営に携わってくださったリーダーやスタッフが集まり、同窓会を開催しました。首都圏をはじめ、広島、秋田、岩手、気仙沼から19名が参加し、3年ぶりの再会の喜びを分かち合いました。

同窓会では、ドリームキャンプをス

ライドで振り返りました。そのスライド制作の作業をしながら、いろいろな思いが込みあげてきました。大変だったこともたくさんありましたが、それ以上に、楽しかったこと、やり甲斐や達成感、感謝の気持ち、そういった思いが蘇ってきました。

そして、写真や資料を振り返るなかで、「私たちはとても大きなことをさせていたできてきたのではないか」と思うと同時に、「このまま終わらせてよいのか」という、後ろ髪を引かれるような思いもありました。

ドリームキャンプも第7回・第8回になると、隊員で参加していた子が高校生になり、リーダーとしてキャンプを支える側になっていくという、当初から目標に掲げていた循環が生まれ始めた矢先、コロナによる延期ということになり、とても残念でした。

とはいえ、8年もの長きにわたり、多くの方々にドリームキャンプを支えていただきました。延べ参加者数、約100人がドリームキャンプに関わってくださいました。改めてお礼申し上げます。

今後のドリームキャンプ実行委員会の活動としては、「ごども食堂」は継続の予定です。またドリームキャンプに代わる新たな活動も、今後検討していくつもりです。

これまでに頂いた皆さまとのご縁を大切に、地域の方々のお役に立てる活動ができるよう考えていきたいと思っています。ありがとうございます。

ドリームキャンプ実行委員会
委員長 奥原幹雄

ドリームキャンプ同窓会&震災遺構ツアー

9月2日(土)、気仙沼市のホテル一景閣にてドリームキャンプ同窓会が開催され、全国から19名が参加しました。

ドリームキャンプがコロナ禍により3年間の中断を余儀なくされ、4年目の再開も検討しましたが、環境・状況の変化を考慮し、このたびドリームキャンプの終息を決定しました。

そこで、関係者やキャンプリーダー・スタッフ有志により、同窓会を開催することになりました。

17時に開会。奥原幹雄実行委員長の挨拶、ひかりプロジェクト藤原真久理事長の来賓挨拶のあと、ドリームキャンプ第1回〜第8回の様子をスライドで観ながら、みんなで懐かしく振り返りました。



スライドの説明をしながら話す奥原幹雄さん

ドリームキャンプ開催のきっかけとなったのは、当時、気仙沼に常駐してボランティア活動に取り組んでいた清水幹生さんの「子どもたちのためにキャンプをやる」との一言でした。

第5回に初めて気仙沼大島のキャンプ場で開催した時の動画では、フェリーでの渡航や小田の浜での海水浴、かまごでの炊事、キャンプファイヤーなど、子供たちの笑顔と楽しい思い出が蘇ってきました。

各回のキャンプの様子と共に、新たな展開として、こども食堂の発足や外部企業からのボランティア活動への財的支援や気仙沼の社会福祉協議会のご理解も頂きました。また、6回目からは市内や県内の高校生が、7回目にはドリームキャンプの卒業生がスタッフとして参加してくれました。

18時からは一景閣の美味しい料理を頂きながらの歓談。

坂本正人さん(DC実行委員・南町紫神社前商店街)による乾杯・挨拶のあとは、参加者全員がドリームキャンプの思い出やエピソード



乾杯の発声は坂本正人さん(右)

ド、近況などを語りました。東京からは、田中元雄さん、真人さん、さくらさんご一家が、Zoomで参加され、同窓会の雰囲気を感じていただきながら、コメントも頂きました。

そして、小野寺一雄さん(DC実行委員・南町紫神社前商店街)による手締めで、20時に閉会。終始笑顔と歓声の中で、アツという間の3時間でした。

また、同窓会の案内には出欠の返信と共にのgoodroomにより、アンケート回答を頂く仕組みを作りましたので、十数名の方々からキャンプの思い出や各自の近況について、



回答を頂きました。また、かつて隊員だった子どもたち十数名からも届きました。

《震災遺構ツアー》

3日(日)の9時〜15時、気仙沼、陸前高田の震災遺構3か所を見学しました。

・気仙沼市復興祈念公園

(祈りの帆)

・高田松原津波復興祈念公園

(東日本大震災津波伝承館)

・気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

(気仙沼向洋高校旧校舎)

施設内展示や映像は、当時の状況を克明に忠実に再現されており、驚くとともに現実を再認識させられました。

かつてこのような状況の中で人々が被災し、徐々に復旧・復興してきたことは決して忘れてはならないことで、後世に伝えていくことが重要だと感じました。また、今後どこかで震災が起こった場合は、どのようにして身を守るか、いかに経験を生かしていくかが問われているような気がします。

ドリームキャンプのご縁でつながったメンバーの、感慨深い2日間でした。

(大江靖記)

参加者の感想

【村田 聡さん】

3年半ぶりの気仙沼。久しぶりに顔を合わせ、近況を聞き、とても有意義な同窓会でした。数回参加したドリームキャンプそれぞれに思い出があり、それを思い返すことができました。

遺構ツアーでは、復興祈念公園と陸前高田の伝承館は初めてだったので、貴重な体験をさせてもらいました。

東日本大震災がなければ行くこともなかったであろう気仙沼や東北ですが出会った方々との絆、ご縁は大事にしていきたいと思っています。

【井上 智恵子】

同窓会&気仙沼・陸前高田ツアーで有終の美を飾ったドリームキャンプ。皆さんと一緒にボランティア活動をさせていただいた、思い出が詰まった一景園で締めくくれたのは、誠に有難いことでした。

ドリームキャンプに参加するたびに子どもたちに元気づけられたり、気づきをもたらしました。これは他のボランティア活動も同様です。

キャンプに参加してくれた子どもたち&申し込んだけど抽選に漏れてしまった子供たちが、これからも元気に楽しく過ごせますように！



気仙沼市復興祈念公園にて

子どもたちの近況アンケートの中に「高校アーチエリー部で活躍中！」とありました。奇遇ですね、私は大学でやっています。いつか対戦しましょう！



津波により運ばれてきた車（気仙沼向洋高校旧校舎）



陸前高田 防潮堤からかつての道の駅を望む

防災一口メモ (第11回)

非常用食品備蓄

先日開催された防災出前講座で、参加者から、次のような意見が出ました。

「大きな災害に備えて、最近は一週間の食料備蓄が必要だと言われているが、我が家のように狭い家では、とても一週間分の食料など保管できない」

最近の防災関連のセミナーや本などでは、南海トラフ巨大地震などが発生したら災害規模が大きいので、すぐには救援に駆けつけることが難しく、1週間分以上の備蓄が望ましいとされています。子どもの防災講座でもそのように言います。

しかし、この参加者のように「言われることはもっともだが、現実的には無理。だから備蓄はできない」という方も多いのではないのでしょうか？

東京都が首都直下地震等に備え、この10年間で取り組んだ成果として昨年発表した中で、家具類転倒防止等実施率は53.6%→57.3%、日常備蓄の実施率^(※)46.4%→56.3%(*2017年からの変化)と、自助と言われる部分でのやるべき取り組みは、あまり進んでないのが現実です。

非常用の食品というと、飲料水(1

人1日3リットル)、缶詰やレトルトのご飯・おかず、アルファ米、ドライフーズ、インスタント食品、乾パンなどがあげられますが、そういうものでないといけないのかと思いがちです。確かに、日持ちがするものと言えればそういった食品ですが、普段食べているものはあまり含まれていません。また、毎日飽きないようにメニューも考えてなどと言われると、一般の人は戸惑うばかりです。

まずは冷蔵庫の中を確認しましょう。大地震が起きると停電も考えられ、普段と同じようにはいきませんが、どの家庭でも2日や3日分の食料はあるのではないのでしょうか？

言われなくても、まずは真っ先にそついったものから食べると思いますが、もちろん、生ものの腐敗には絶対注意が必要ですし、自分で判断するしかありません。お米のストックもあるでしょう。

でも電気やガスが使えない時に備えて、一口ガスコンロとガスボンベは絶対必要です。

そのように考えると、備蓄する食品の量も変わってくるのではないのでしょうか？

お水の保存ですが、2リットルペットボトルだと、3人家族で1週間分は約30本です。

いずれにしても、いざという時、手元にある食品で生き延びる決心と、自分と家族の命は自らが守るしかないということです。

今年線状降水帯による大雨被害が続出 15カ所へ清掃用タオル3千枚を支援

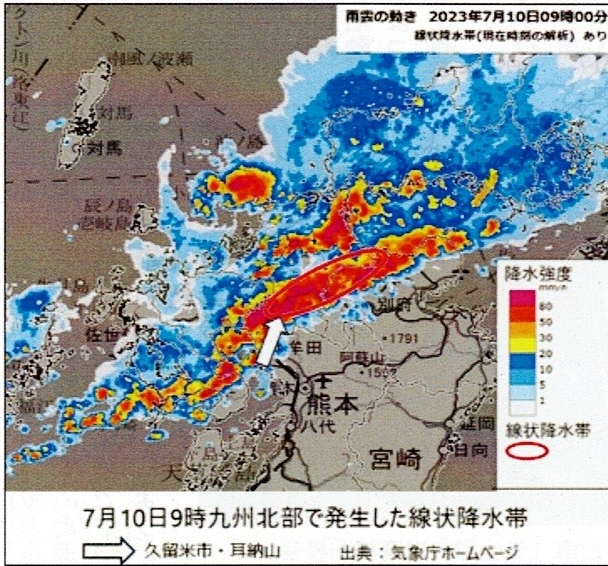
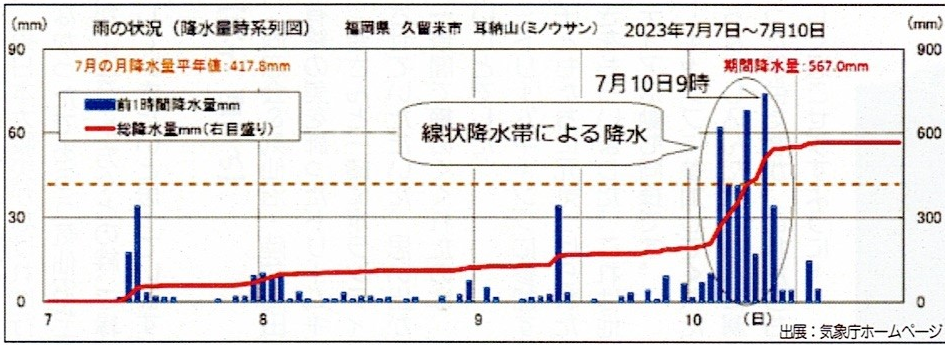
今年の夏は、全国各地で記録的な大雨による被害が相次ぎました。

6月初めには梅雨前線が本州近くに停滞し、台風2号に伴う暖かく湿った空気が流れ込み、太平洋側で線状降水帯が次々と発生しました。このため、167地点で6月の24時間降水量が1位を更新する大雨となりました。

6月末から7月にかけて、太平洋高気圧の縁を回って日本海側に多量の水蒸気が流入したため、西日本を中心に線状降水帯が多発し、広い範囲で大雨となりました。

大分県、佐賀県、福岡県では200ミリ以上の降水があり、北海道、東北、山陰、山口県を含む九州北部でも、平年の2倍以上の雨量を記録しました。

8月は台風6号、7号の北上に伴って、南海上から多量の水蒸気が流れ込み、台風の進路に近い西日本で大雨となりました。鳥取県、香川県及び岩手県では、平年の8月の降水量の2倍を超える雨量となり、京都府でも浸水害による被害が発生しました。



福岡県久留米市 雨の状況と雨雲の動き (2023年7月)

さらに9月は、台風13号が関東甲信地方や東北地方で、大雨をもたらしました。特に東京都(伊豆諸島)、千葉県、茨城県、福島県では、猛烈な雨が降り、1時間に80ミリ以上の降水が観測されました。

この夏の大雨は、線状降水帯による局地的な豪雨が特徴でした。道路や側溝、地下施設、アンダーパスにも被害をもたらしました。

これらの背景には、地球温暖化による長期的な気温上昇と水蒸気増加により、極端な大雨の頻度が増加している可能性があります。そうすると、今年に限ったことではなさそうです。



傘は全く役に立たない < 1時間雨量50mm以上の場合 > 車の運転は危険

清掃用タオル お役に立っています!

ひかりプロジェクトが水害被害等に対する清掃用タオルの備蓄と、支援を呼びかけ始めたのは、2021年からでした。当時は組織的な動きはできませんでしたが、熊本県球磨川氾濫による人吉市の洪水被害に、メンバーがタオル支援をしました。2022年から本格的に動き出し、こちらから積極的に被災した市町村の社会福祉協議会や、被災地近隣の知人・友人に連絡して支援を申し出たことから、この取り組みは軌道に乗ってきました。

昨年は9カ所へ1,300枚、そして今年も、9月末で15カ所に3,100枚余りを支援させていただきました。

もちろん、これができるのはタオルを集めてくださる協力者があるからです。現在、3個人、15団体が協力してくださっています。

福岡で精力的に声掛けをして、たくさんの方のタオルを集めていただいている田中佐百合さんは、「今年の6月、7月に同じ福岡県内で大雨による被害を目にして、何をしていたかわからないという方がおられ、被災地に行ってお手伝いできなくても、タオルを送ることで支援につながることをお話ししたら共感してくださり、自分たちでも集めて、被害に遭ったところに届けると言ってくれた」と話しておられます。

また、山形県の工藤信子さんは、「皆さんの自宅にあるタオルをそれぞれが少しずつでも持ち寄ることで、お役に立てるのは有難いし、誰にでもできる

ボランティア活動だと思えます」とおっしゃっていました。

7月に入ってタオルの備蓄も底を尽きかけ、協力者の方々に緊急でお願いしたところ、7月末以降、2,800枚以上が送られてきました。皆様の迅速な対応に感謝申し上げます。

支援させていただいた社会福祉協議会の担当者にお聞きすると、「当初は、災害復旧現場一個所につき清掃用タオルを10枚持ち込んでいましたが、足りないことが分かり、50枚に増やしました」とのことでした。浸水被害の現場では、清掃用タオルのニーズが高いことを再認識しました。

*

このように、お寄せいただいた清掃用タオルは、大変お役に立っています。つきましては、会員の皆様、協力頂いている皆様に、引き続き清掃用タオル収集にご協力をお願いいたします。



田中佐百合さん宅に積み上げられたタオルと段ボール箱



田中さんの孫・柚さんも、タオルを畳んで揃えるお手伝い

タオルは、使用済み(洗濯したもの)、あるいは新品の、フェイスタオルとバスタオルに限りです。

グループで集めていただいている場合は、100枚を超えましたら左記にご連絡ください。送り先をお知らせします。

新品と使用済みを分けてビニール袋等に入れて、段ボール箱にできるだけ満杯に詰めてください。箱にそれぞれの枚数を記していただくと助かります。着払いでお送りください。

個人の場合はあるだけで結構です。同じく左記にご連絡ください。

皆様のお気持ち、水害で被災された方々のお役に立ち、勇気づけます。どうぞよろしくお願いたします。

◆連絡先 橋本 敏廣

◆電話 090-6399-2311

◆メールアドレス

t.hashimoto@hikari-project.org

三重県津市と東京都文京区で 防災出前講座を開催

《三重会場》

6月24日(土)に、金光教勢津教会(三重県津市)を会場に、第3回防災出前講座が開催されました。

コロナ感染も下火になりましたので安心して開催することができましたが、念のためスタッフはマスクを着用しました。参加者は、受講者19名、講師・スタッフ4名、合計23名でした。

開催地の三重県における「南海トラフ巨大地震」「内陸直下地震」の被害想定と、主催者の講座に対する要望等から、「テーマを「地震から身を守る」にしました。

プログラムは、



・映像「南海トラフ巨大地震」視聴

・「地震発生のおしきみと南海トラフ地震の三重県での被害想定」

・「地震から身を守る」

・映像「電気災害への備え」視聴

・グループワーク その時あなたは「どうする」

・「地震発生時及びその後の行動について」

13時から開始し、映像視聴、講義、グループ討議と発表、簡易トイレの実演と、多彩な方法で進められ、16時過ぎに終了しました。

○ 今回の会場は、私の自宅から近く、講座内容の事前打ち合わせや、会場の確認、映像装置や音響装置など機器類の確認を、その都度出向いて実施することができました。

ところが、本番でハウリングを起こす場面がありました。原因は、パソコンと音響装置を接続するケーブルが短いことでした。事前に音響装置と接続して確認していましたが、会場でケーブルや機器類を配置して行う確認はできていませんでした。

被害想定を十分確認して、事前の備えを実施することは、防災活動における重要な柱の一つです。講座を開催する場合も防災活動と同様で、トラブル予測をして事前の備えを実施することが重要であるにもかかわらず、それが

できていませんでした。
今回の経験を、次回からの講座開催に生かしてまいります。

(橋本敏廣 記)

参加者の感想——

【笠井洋一さん】

当日は、講師、スタッフ4名の方々が朝10時から集まって準備をしてください、午後1時からの講座には19名の受講生が集まり、立派な資料をもとに、プロジェクトを使って、地震のこと、また地震から身を守るということについて、わかりやすく教えていただきました。

また、4〜5人に分かれて、四日市のデパートに買い物に行っている時に地震に遭ったらとか、御殿場海岸に海水浴に来ている時に地震発生した場合とか、私たちの住んでいる地域を想定した問題で話し合いをする場を作っていただき、とても身近に地震を感じる事ができました。

地震についていろんなことを教えていただきましたが、知っているのと知らないのでは大きな違いがあるなと思います。

中でも、簡易トイレで排便した後には猫砂をかけておく匂いが軽減されると聞き、思いもよらなかったことで、「なるほど、猫砂か」と感心しました。

【鈴木裕志さん】

コロナ禍で久しぶりに多くの皆さんが揃った勉強会は、講師・スタッフの皆様の準備や段取り等で、とても有意義な時間でした。

「南海トラフ地震」に関する概要（ビデオ映像含む）や、三重県や地元津市

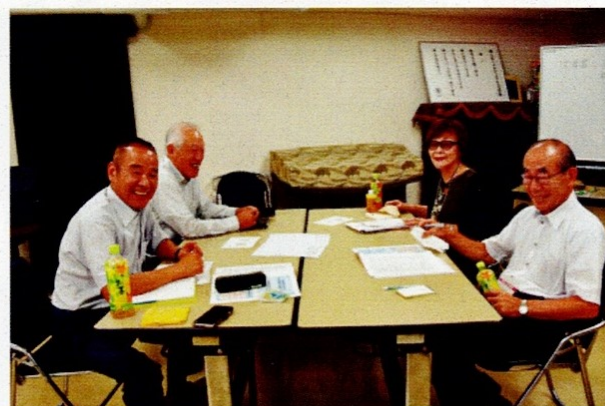
での被害想定についても説明していただきました。何度もテレビでは見聞きしていますが、近年に起こり得る大地震、津波など、私たちの切実な問題として考えたことは、これからの「備え」についても真剣に取り組み意識につながったと思います。

また、説明を聴くだけでなく、4つの班に分かれての「グループワーク」も短い時間ではありましたが、それぞれが考え、意見を話し合ったことで、自分の記憶に残る勉強会になりました。

まとめとして、「根拠のない大丈夫」で通信することなく、被害想定に依じての「備え」について、普段から考えておくことの大切さも教えていただきました。私たちの周りの人たちにも教えてあげることが、今回のお礼につながるのかなと思っています。

《東京会場》

9月9日(土)、金光教センタービル(東京都文京区)において、第4回防災出前



グループに分かれて話し合いました

講座が開催されました。

「地震から身を守る」をテーマに、首都圏で想定されている「首都直下地震」を中心に研修しました。

参加者は、受講者13名、講師・スタッフ4名、合計17名でした。

最初に、「自然災害」全般の講義があり、映像「首都直下地震」(内閣府制作)を観た後、「地震発生のおくみと首都直下地震」、「地震から身を守る」の講義。そして休憩の後、4つのグループに分かれ、それぞれ違う想定で、「その時あなたはどうする」というテーマで、地震発生時、および揺れがおさまってから取るべき行動について、想像力を働かせながら話し合いました。

(阪本正雄・記)

参加者の感想——

★いたせりつくせりの内容で、大変得るところが多く、家庭でも繰り返し訓練しなければと思いました。

★防災に対する備えをしていないことを猛省しました。できることから備えをしていきます。

★講座を受けて、自分の防災意識が高まりました。家族で防災会議を開こうと思います。

編集後記

▼東日本大震災復興支援のひとつの柱だったドリームキャンブが、終息することになりました。関係者で何度も議論した上での決定でした。でも復興支援が終了したわけではありません。今後は新しいカタチでの支援を現地の方と共に模索・検討協議してまいります。

▼関東大震災から今年で100年になりました。首都直下地震や南海トラフ巨大地震の可能性がクローズアップされ、各地で開催される防災出前講座も、それが主なテーマになっています。今夏は線状降水帯による局地的な大雨被害が特徴でした。大雨被害に対する知識や、事前の備えなども重要なので、今後の防災講座で取り組んでいきます。

(大江 靖)

ひかり新聞

No.48 2023年(令和5年)10月25日

発行者：一般社団法人 ひかりプロジェクト

〒401-0304 山梨県南都留郡富士河口湖町河口1975

電話 0555-72-8191 FAX 0555-76-6696

https://www.hikari-project.org E-mail:hpa-office@hikari-project.org